



三重大学教育学部
国際交流ニュース
レター 第3号

平成20年(2008年)
2月20日発行

天津便り

興味深かった中国の学生の
生活文化

教育学部長 山田 康彦

海外出張報告

サンディエゴ滞在報告

保健体育講座 重松 良祐

学生海外活動

・中国・内モンゴルの小学校
における「科学」の授業実践
理科教育専修2年 王 雪松

・調査研究でフィンランド・
イギリスを訪問しました
研究員 世良 清
(四日市商業高校教諭)

留学体験記

・UNCW に留学して
英語教育コース4年
笠原 智子

・UNCW に留学して
英語教育コース4年
高橋 真里

興味深かった中国の学生の生活文化

教育学部長 山田 康彦

天津 便り

今回の天津師範大学には、3つの目的をもって訪問しました。一つは、学部長就任以後、まだ一度も天津師範大学の教員とお会いしていませんでしたので、鐘国際交流学院院长をはじめとしたスタッフの方々に挨拶をすることです。二つめは、私はこれまで、天津どころか中国自体に一度も訪れたことがありませんでしたので、天津師範大学を訪れて、どのような環境の中で教育や学習活動が行われているかを知ると同時に、特に来年4月から来学する21名の日本語コースの学生たちの学習や生活の様子を知ることです。三つめは、長期派遣で日本語教育に携わってくださっている伊藤彰男先生と宮岡邦任先生にお会いして、その貢献に感謝するとともに健闘をお願いすることです。

天候不良で飛行機が戻ってきてしまったため日程が一日短くなったり、宮岡先生が出張中なためお会いできなかったこともありましたが、当初の目的は達成されたと判断しています。高学長と親しく交流することができ、鐘学院院长からは天津師範大学の日本語コースの共同運営を中心とする天津プロジェクトの現段階の進展状況と今度も見通しを詳しく聞くことができました。

また日本語コースがある校舎の教室や教員室の環境を確かめると同時に、学生には短いスピーチをし、勉学の姿勢が真摯であり、日本語にかなりの理解力を持っていることを実感しました。とくに興味深かったのは、前日の国際交流学院の学生間での交流会で披露したというオペレッタを私たちにも演じて見せてくれたことです。かつて我が国でも学校や地域で、自分たちで芝居を作り、互いに演じて合せて楽しむという演芸会のようなものがありました。私たちの国では、そのような文化はかなり廃れてしまいましたが、中国ではまだ生活の中に残っているのではないかと感じました。そのようなことを楽しめる学生たちなのです。

伊藤先生とも久しぶりにお会いし、お元氣そうだったのでほっとしました。特に今回は奥様も私たちと一緒に訪問したため、「家では寡黙で、お酒も飲まず、かつての『日本の男』っぽい」という大学では見られなかった一面を見させていただきました。

その他、附属中学校と交流のある天津でも指折りの進学校である天津師範大学附属天津実験中学校を訪問し、学校環境の違いに驚いたり、中国の交通事情の激しさに目を見張ったりなど、いろいろ見聞を広めることができました。



教育学部長一行歓迎の宴

海外出張報告

2007年8月8日から2008年1月7日までの5ヶ月間、アメリカ合衆国カリフォルニア州サンディエゴにあるサンディエゴ州立大学(San Diego State University)に行っていました。ご存じのように、サンディエゴはアメリカ西海岸の南端に位置しており、メキシコとの国境も非常に近いところです。緯度は九州とそれほど変わらないのですが年中暖かいです。さすがに12月ごろの早朝ともなるとコートが必要ですが、日中、陽が差しているところでは半袖で過ごせるくらいです。

今回の渡航は、文部科学省の大学教育の国際化推進プログラムの1つである「海外先進研究実践支援」によるものです。現地では、「環境要因が身体活動にどのような影響をもたらすのか」について先進的な研究の取り組みを学びました。ご存じのように、アメリカでは肥満や種々の疾病の増加が問題視されており、これに対してさまざまな解決策が講じられています。解決策の1つに身体活動量をアップさせる、というものがあります。身体活動は、いわゆる運動(エクササイズ)だけでなく、通勤時の歩行や庭での仕事などの活動すべてを含みます。身体活動量をアップさせることで過剰に蓄積した脂肪を減らし、その結果、疾病のリスクを下げようという試みです。

これまで身体活動量をアップさせようという勧告(ススめ)が何度も示されてきていますが、活動的なライフスタイルに変容する人が少ないと指摘されています。そのため、運動に対するその人の考えを変えたり、心理的な障壁を下げたりしていこうという「行動変容」というアプローチ方法が脚光を浴び、その手法がいくつか考案されました。しかし、それでも不活動であり続ける人の割合は高いと指摘されています。

そこで、近年では「歩かざるを得ない」あるいは「思わず歩いてしまう」ような環境を設定し、身体活動量をアップさせようという研究が注目されています。教育学的にみるとアフォーダンスという用語と関連しているかもしれません。私は、これら一連の研究の流れを、①運動しない人に対して実践することを期待していた時代から、②その人の考えを変えていこうという時代に移り、さらに現在は、③その人の考えの変容をアテにしない時代に移ってきているように解釈しています。アメリカの直面している問題の切実さをあらためて認識できます。



オフィスの中庭で研究室スタッフと。右端が受入研究者である James F. Sallis 教授、左端が筆者。

日本はアメリカほどではありませんが、肥満や不活動状態が問題になっています。私は今回の滞りで得た知見を活用し、日本における「身体活動に及ぼす環境の影響」について検討していこうと考えています。

日本はアメリカほどではありませんが、肥満や不活動状態が問題になっています。私は今回の滞りで得た知見を活用し、日本における「身体活動に及ぼす環境の影響」について検討していこうと考えています。

学生海外活動

中国の小学校では、日本の「理科」に相当する教科は「科学」で、一般的な小学校では教科書を中心とした授業で、実験や観察が行なわれていません。生物分野の内容では、身近な生きものに触れて観察することで生物に興味をもち、生命を実感し、学習意欲が高まると考えています。私は現在、中国で入手できる小動物を活用した授業に関する研究を進めています。中国の小学校で実施可能な教材生物を選んで授業実践をする必要があり、出身地である内モンゴル自治区フフホト市の小学校での授業実践を計画しました。教材生物として適当なものを検討するために、2006年9月に内モンゴル師範大学附属小学校や、フフホト市内の観賞魚市場を視察しました。その結果、いつでも入手でき、安価で丈夫な小動物として、ドジョウとミジンコがあることが分かりました。これらを用いて、生命を実感させる「心臓の拍動」を観察する授業案を立て、津市内の小学校で試行してから、2007年10月11、12日にフフホト市内の小学校2校(小召小学校、梁山街小学校)で各校6年生2クラスを対象に授業を実施しました。1クラスの児童数は約50名と多いのに対して、観察に必要な顕微鏡は6台しか用意できませんで



授業後に集まる子どもたち

したが、40分の授業時間でアンケート調査も含めて計画通り実施できました。児童らは規律正しく、私の話に集中し、配布プリントを熱心に読んでいました。はじめて使う顕微鏡が珍しいせいか、熱心に顕微鏡をのぞき込んでいました。ドジョウの解剖についても抵抗がないようで、意欲的に取り組んでいました。残ったドジョウやミジンコの飼育を希望する児童もいたことから、観察の意義は大きいと感じました。また、授業参観した教師らは授業内容を高く評価してくださるとともに、実際に小動物を観察することで児童が生物に強い関心を示すことに気付いたようです。児童の真剣に学ぶ姿、知識欲に溢れている瞳、そして「日本に留学して知識のある先生が授業してくれて嬉しかった」という感想などから、面白い授業ができる小学校教員になりたいという気持ちが胸いっぱいになり、貴重な経験となりました。

調査研究でフィンランド・イギリスを訪問しました

研究員／四日市商業高校教諭 世良 清

海外の学校における知財教育の調査と、それに基づく日本での知財教育を構築する研究を特許庁からの委託研究を進めています。その一環で、2007年11月18日から25日にかけて、三重大学（吉岡利浩氏：院生／豊里中学校教諭と私）、名古屋大学、信州大学、富山大学からなる調査団6名で、フィンランドとイギリスを訪問しました。

フィンランドでは、ヘルシンキ大学、ユバスキラ大学と附属学校を訪問し、授業の様子を参観、子どもたちとも触れあいました。学力調査で世界的に注目を集める国ですが、決して知識習得に偏った学力ではなく、自然の木材を活用し、子どもたちが工夫しながら行うものづくりに力を入れている様子を目の当たりにすることができ、創造する力を培うことが重要だと認識することができました。イギリスでは、ラフバラ大学の技術とデザインを融合させた教育を視察しました。ここでもただ技術の習得だけを目指すのではなく、完成する商品を視野に入れた高度なものづくり教育の様子を垣間見ることができました。ともに日本の教育のあり方を考える上で重要な知見を得ることができました。



ユバスキラ大学での教員養成における技術実習の様子

これら調査研究の成果は別部隊の調査（米国、中国他）と併せ、報告書の作成とともに、セミナーを開催して広く公開する予定です。セミナーにはフィンランドでお世話になった Tapani 氏を日本にお招きして、東京と三重で開催します。皆様のご参加をお待ちしています。

【テーマ】「フィンランドの教育から学ぶ ―これからの日本の知財教育―」

【東京会場】2月22日（金）13時～17時 キャンパスイノベーションセンター東京

【三重会場】2月23日（土）13時～17時 附属学校園内施設「ひまわりの家」

留学 体験記

UNCW に留学して

英語教育コース4年 笠原 智子

私は、2007年8月～2007年12月までの約5ヵ月間、アメリカの UNCW（University of North Carolina at Wilmington）という大学に留学していました。5ヵ月の留学生活はあっという間に過ぎていきましたが、私の人生の中でかけがえのないものになったと思います。

外国人として、外国で暮らすことは、言語や文化の違いの中で生活していくことであり、私はその違いを自分にとってプラスに感じる事がほとんどでした。しかし、時には自分の言いたいことが英語で伝わらなくて落ち込んだり、アメリカの食事に飽きてしまったりと、異文化に悩むことがありました。

そのような時は、同じ境遇にいる留学生に悩みを相談し、アドバイスをもらっていました。

また、セメスター期間の生活は、朝から、晩までレポートにおわれ、一つのレポートが終われば、また次のレポートが待っているという感じでした。留学生の分、他のアメリカ人学生よりも英語の文献を読んだり、レポートを書いたりするには時間がかかったと思います。アメリカの大学で授業を受けるに当たって、英語の文献を読んだり、英語でレポートを書いたりすることに慣れておいた方がいいと思いました。私は三重大学の英語科の授業の中で、そのような練習をしてきてあったので、今回の留学でとても役に立ったと思います。



NYへ仲よし4人組で旅行

私は教員志望なので、英語を教える上でアメリカでの経験を語り、生徒に少しでも異なる国や文化に興味を持ってもらえたらいいなと思います。また、留学を通して、アメリカの友達、外国の留学生、教授、ホストファミリーと連絡を取り合うようになったので、これらの人々との繋がりをずっと大切にしていきたいです。

私は今回の留学で、いろいろな世界をみることができ、いろいろな国の友達ができ、世界が広がり、知識が広がったことが何よりの収穫です。留学中には学校の勉強だけでなく、ニューヨーク、フロリダ、ロサンゼルスなど、休みを利用して友達と旅行に出かけることもできました。留学することに迷っている方も、不安を感じる方もいるかもしれませんが、言語だけでない貴重なことを学ぶ良い機会だと思って、是非チャレンジしていただけたらと思います。

UNCW に 留学して

英語教育コース4年 高橋 真里

「えっ、速い…」アメリカで私が最初に感じたのは、思った以上の英語の速さでした。友達や先生の話を書くのにも集中力が必要で、最初は夜に寮に帰るとぐったりしていました。私は日本ではよく話をするほうですが、留学した最初の頃は英語になるとおとなしくなっていました。この頃は、本来の自分らしくいられないことにもどかしさを感じていました。しかし、毎日友達と英語で話しているうちに、だんだんと自分らしくいられるようになってきました。

大学の授業では、わからないことは授業後や時間外に教授に質問しに行きました。レポートが多い授業を履修していたので、図書館に籠もってレポートに集中しなければならないこともありました。大学の勉強は大変でしたが、私は友達といろんなところに行き、一緒に過ごす時間を大切にしました。アメリカ人だけでなく世界中から来ている留学生の友達もたくさん出来、今まで知らなかった新しい文化に触れることが出来ました。

授業においても日常生活においても、ためらわずにいろんなことをやってみると良いと思います。一つひとつの出会いを大切にしている人々と積極的に関わっていくと、どんどん世界が広がっていきます。

この留学は私にとって何にも代えられない財産になりました。留学で学べるのは英語だけではなく、私は世界の様々な文化にとっても興味を持つようになり、もっと英語を学びたいと思うようになりました。そして何より、たくさんの友達を得ました。これからも英語を勉強し続け英語教師になり、この留学の経験を子どもたちに話したいと思っています。英語を学びより多くの人と関わることで、自分の世界が広がっていく嬉しさを子どもたちに伝えられたらなと思っています。



留学生の友達と Washington, D.C.にて